

日系市民

Yuki

坂井米夫

日系市民 *Yuki*

日系市民 YUK I

坂井米夫 ©

〈検印省略〉

昭和44年7月5日発行

定価 580 円

発行者 田 村 彬

印刷 株式会社堀内印刷所

製本 株式会社昇栄社

発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・中央区江戸橋一の七(103)

大阪・北区梅田町二七(530)

Printed in Japan

もくじ

移民地の母

——緑のサリナス——

3

娘・ジュリア

——戦禍・スパイ・逃避——

135

息子・清志

——二世部隊の勇戦——

197

移民地の母

——緑のサリナス——

1 写真結婚

まあ、またこちらを見ている——ユキは気味がわるくなって上の敷布に足をかくした。

きらい、大きい。二、三日前も夜中にふと目をさますと、隣りベッドの男が鎌首をもたげるようにしてユキを見ていた。汚ないものにさわられた気がして、夜明け近くまでねむれなかった。男は四十前後で、嫁探しに帰国したという再渡米者である。はじめ何もわからなかったのでアメリカの話につりこまれ、相手になったのがよくなかった。食卓でも「米国じゃレディス・ファストといって、何でも男がすることになっています」となれなれしくユキのご飯をよそったり、後甲板に出ているといつの間にかそばに寄って話しかける。かたぶとりの精神的な顔が、いつも圧迫するようにわらっている。ベッドの枠に山田熊一殿と書いた札があるが、本人はマイク・ヤマと称している。ユキが警戒しだしたら、同じ写真組の福永トミ子をちやほやして、時々しつこい目でユキを追う。船酔いと、上陸後の懸念と、ホームシックで疲れ弱ったユキはこの男のためへとへとになりそうだった。

「ヴァジンかヴァジンじゃないか、一目でわかりますよ。」

突然そんなことをいい出して、遙かな水平線の弧を見ていたユキをハッとさせた。不覚だった。虚をつかれて思わず顔を向けた。

「どうして……。」

少しふるえを帯びた声が海風に吹きさらわれて、ユキのからだから血が引いた。

「そりゃ何ですよ、腰のラインがすっかり変ってしまいますからね。いくら帯でゴマ化そうとしたって駄目です。」

ニヤニヤ笑っていた。見すかした大胆さで、すいさしの巻煙草を海に弾きとばした。

俗に蚕棚といわれる三等船室は、上下二段の木造寝台の列がつづいている。前が通路で、寝台の下には信玄袋や柳行李などがぎっしり押し込められている。隣りベッドとの間は板でしきってあるが、空気の流通のために上がずつとあいているから、上半身起きあがって首をのばせば隣りのベッドが見おろされる。

船会社は三等船客が一番もうかるのだが、一等の設備に金をかけるだけで、下の方の追い込み部屋なんか目もくれなかった。ペンキのにおいと、果物か何かのあまずっぱい臭気と、えたいの知れない瓦斯と、体臭と、むっとする人いきれ。四六時中ゴトゴト響く機関の音でイビキや歯ギシリは余り気にならないが、毎晩寝姿を見られていたのかと思うとたまらない。早くサンフランシスコに着けばいい。通風孔からしめっばい外気はいるが、何しろ昼間も炭素線の裸電灯をつけっぱなしのうすぐらい三等船室である。

写真結婚問題がやかましくなり、近いうちに新しい法律が出て禁止になりそうだというので、電報や手紙で急にきまった花嫁と、日本に嫁探しに行った者とその新妻、それに普通の渡航者などを加えて超満員。暑ぐるしい、毛布は足の先にたたんで、寝巻の浴衣に派手な市松模様の伊達巻、上の敷布

を一枚かけたきりであるが、寝つけない狭いベッドで、いつしか寝乱れてしまっている。それをあの男にのぞかれていたのだ。恥ずかしいと思うより腹立たしい気持が一杯になって、もうこれから一言も口をきくまいと決心する。が、何かつまらないことでもしゃべりまわされたら、と思うと情なくなつてきて、つい涙がにじんでくる。

横浜まで見送ってくれた父。家屋敷を二番抵当にまで入れてどうにもこうにもならないでいた「紙屋」にとつて、日本の田舎町ではめずらしい額の支度金は救いの神であった。すぐの弟は病気でなくなつたが、二番目の弟は中学に通っている。今学年限り退学させる筈だったのを、アメリカに行つたら学費ぐらい送ることが出来ようからと、まだ一度も見たこともない人との結婚を承諾した。うわべではいつも面白そうにはしゃいでいる向う側の木村スギ子も、女学校からまっすぐ来たような田上キヌも、だんだん話合つてみると、みなそれぞれ家庭の事情でアメリカにお嫁入りするのであった。

日曜日に一等か二等の牧師さんが下りて来て、説教みたいなお話があった。

「人間はいつも幸福な時ばかりではなく、楽しい時ばかりはない、健康な時ばかりはない。不幸な時、くるしい時、病気になる時、自分一人ではたえられない。キリストはそういう人々に、われに来よとおっしゃった。キリスト教会はそういう人々のためにある。米国にいる日本人の社会にもキリスト教会があるから、この船の中で申しあげたことを思いだされた時には、牧師か教会の会員に相談なさるようにな——」

われにきたれ、われなんじらをいこわせん、という聖書の言葉が何ともいえないぐさめになった。一人が便所の洗面台で髪を洗った、われもわれもと髪を洗ったので水がたまつた。ボーイが舌打ちしながら詰った抜け毛を汚なさそうにとり出した。ホノルル下船の人で船室は少し淋しくなった。

白い鷗が船のまわりに多くなって陸の近いことを知らせる。上陸時の注意や、検疫をうける時の練習があつた。十二指腸虫とトラホームの患者は上陸を許されないので、皆ハラハラしていた。三、四人の花嫁は、禿げ頭の船医に眼瞼をひっくりかえされていたが、あとで医務室に呼ばれた。もう一日で金門湾にはいるという晩に、船員たちの芝居や隠し芸があつた。一、二等船客は中央の一番よいところに椅子をならべ、「一、二等船客の外昇るべからず」とした中甲板へのステップを初めて上つた三等船客は、おとなしく横にすわつたり後の方に立つたりして見物した。日頃散歩するたびに眉をひそめて後部下甲板の三等船客を見おろす外交官夫人や大会社の支店長夫人たちが、夜会服というのか胸、両腕、背中の上の方などを出した長い洋装の裾をひいて、首飾りや腕輪をキラキラさせていた。「日本にかえるときには一等船客になって、あたしもぜひあんな洋装をしたい。」とユキは思った。

金門湾についた日は、まだ暗いうちから起きて荷物を整理した。朝食もそこに検疫を待った。心配と興奮でご飯も碌々ノドをとおらなかつた。花嫁達は皆一番の晴着に着かえ、そわそわして何遍もお化粧した。髪は前日に結び直していた。前髪にカモジを入れた束髪、ユキは紅葉を刺繍した半エ

りをわざとつけた。これは写真結婚の夫になる人との間に、世話人の校長先生が打合せておいた目印である。花婿はバラの薔を上着の襟にさしていることになった。

人のよさそうな検疫官が、船医と事務長と英語で話しながらユキの前に立った。ユキの顔から固い白足袋の爪先に視線をおろして次にうつった。ただそれだけであつた。移民官が一等のサロンで一人について質問した。通訳が日本語になおしてたずねる。要点は北山大吉——これがユキの花婿の名前であるが、その男と正式に結婚して米国で生活する意志であるかどうかをただすのである。それがすむと、総領事館や日本人会、教会などの代表者が世話してABC順に分け、花婿の名前をたずねて双方を引合せる。

「静岡県のミスター江川！ ミスター江川！」

「広島県の中村くん！ 中村漫吉くんは居らんかあ！」

「フロリンの橋本彦三くん！ こっちこっち！ ハリアップ！」

口を固く結んだ花婿が、写真や書類を手にアタフタと出てくる。花嫁は腰から上を折るように低く低くおじぎをする。こわばった表情、チラと見た目をふせる。花婿に附添つて来た同県人らにとりまかれて上陸する者もある。油や石炭のよごれがそこに残っている機関部員や、白い帽子をかむつたままの司厨部の連中が、最上甲板のてすりや舷側の丸窓に折重なつて見ている。

「黒川さん、ぜひお手紙下さいね。じゃお先へ、さようなら！」

ユキと同じ側の蚕棚にいた野口きぬ子が、山高帽の背の低い男、木刀ヒゲのおじさんみたいなお婿

さんとならんで向うに行ってしまった。糸田しげ子がかつぷくのいい三十七、八の男に信玄袋を渡し
ている。

「……北山大吉さん！ 北山くん！」

ユキの視線がドキドキした男達の群に釘づけになった。

「イヤー、私が北山ですが——」

「黒川さん、ああ、あなたが黒川さんでしたね。北山くん、手紙と旅券を持って来とるだろうな、一寸出して下さい。」

ユキは立ちすくんで、そむけた目をもう一度見直すようにその人に向けた。人ちがいであつてくれ、と、絶体絶命の心でねがった。駄目！ バラの蕾、北山にちがいないのだ。二十ぐらい年が違うのはアメリカでは普通だときいていたが、この人はあんまりだ、年はそれ程でもないらしいが、写真とは全然ちがった顴骨かん、ずるそうな目、どことなくいやしいこの男が夫かと思うと、まっくらになった。いやだ、どうしてもいや、でも、でも……どうしよう。弟が、病身の母が、負債にうちのめされた父が、家が、くるくるとうかんだ、誰かが紹介してくれる言葉もうわの空であった。

ぼうっとしたままいつか税関の荷物検査をすまして馬車にのった、煉瓦のような切石を敷きつめたところを走って行く。

ちんと揃えた膝のさきを見ながら、ユキは泣けそうになる心を叱った。それがまた自分を可哀想に思う気持をつのらせて、目がくもって来た。

……これがマーケット・ストリートで一番にぎやかな通りです。向うの突き当りがフェリー・ビルディング、オークランドへ行く渡し船の……。

仕方がない、何とか道がひらけるだろう、人間だれしも思いのままになるものではない。上を見たらキリなし、この人にも何かいい所があるだろう。今更日本へ帰れるものでもない。でも、この人はシンからいやだ。笑うときの歯齧がゾットする、いやだなあ。しかし何とかなるだろう。といって、どうしたらいいかしら……。

広い通りから斜めに曲って少し狭い坂道になる。両側にいろんな店がある。美しいショールウィンドー、通りすがりの米人が珍しいものを見るようにこちらを見る。ああ早くこの日本着を洋装にかえねば――。

「洋装は、仕立屋にたのむのでございましょうか？」

「仕立屋？ いいんや。デパートメントストアに行きやあ、何のこたあない。あとでホテルのママが連れていってくれる、いやわしがつれて行こう。あんた疲れたろうなあ。」

大体のことは船の中でもきいていたが、実際に見るアメリカは全く別の世界であった。家に、友達に書いてやりたい。世話人の校長に見せてもらったアメリカの絵葉書。あれを送ろう。だってあんな踵の高いさきの尖った靴をはいて歩けるか知らん。内足に内足に、しとやかに歩くことにならされて来たのに。西洋婦人は男と同じようにシャンとして歩く。サッサとスカートを蹴るように外足……。坂を上ったり下ったりして同じくらしいの三階建のならんでいるところに来た。街なみがわるくな

ったことがわかる。日本人らしい男や女がちらほらいる。馬車がとまった。

「ここです。荷物は宿の者がはこぶから——」

下りるときに肘をつかまれた触感が身内を走った。ホテルの事務所は二階で、その横に休憩室らしい広間がある。人が多勢出たり入ったりして煙草の煙がたちこめている。みな日本人でアメリカ人は一人もいない。同船の花嫁組も三、四人いた。ホテルの主人の妻君が昼食後に服や靴などを買いにつれていくから、あとでこの室に集って下さいといった。

思いがけない男の行動に、ユキは愚かしくとまどいし、はがゆくてたまらないがどうにもならなかった。アメリカでは婦人を大事にする、男より女の権利が強い、ときいていたのに……。きらい。男のするがままするずる引きずられて、まあ、と胸をつくろって身を固くした。すくんで、ふるえながら顔をそむけた。ぐわっ！　せなかをひどく突かれて、恐怖と混乱で起きあがろうとするからだを激しく引きもどされた。

支度金……旅費……結婚詐欺……警察……父母。ねむるまい、死んでもねむってはいけない、と思いつづけたがトロトロとねてしまっていた。重く、身を起すとまだ暗い。日蔽をおろした窓のふちから外光が細くさしこんでいる。ああ、朝になったのか、と見るとユキは着物を着たままであった。帯に手をやった、昨夜のままであった。そっと起き上って手洗に立とうとすると、よろめいて倒れそうになった。せなかが、肩が、腰が、からだ中がいたい。手拭をしぼって首の後を冷やした。鏡にうつ

る眼が腫れて、なさけない顔になっている。ユキは顔を何度も洗った。石鹸で、唇を、頬を、こする
ように洗った。何回も何回も口の中をゆすいだ。しわだらけになった着物が、自分の今の運命のよう
に、引っぱってもおさえてもまたもとにもどる――。

「……もうどうか……わがママを申しあげてすみませんが……どんなことをして働いても、きつとお
返しいたしますから……」

ひざまずいてねがった。恐ろしい力で抱きすくめられ胸がつぶれそうだった。人間ではない行為、
少し気狂ではないだろうか。いや、いやだ、大きい、きたない！ なにか不思議なことが起って、
この男の手からのがれることはできないかと、あてにならないことをしきりに思って、窓の外を見
た。平たい黒い屋根の向うに屋根ばかりつづいていた。下り坂になって、ずっと向うがまた家つづき
の丘、日本の家らしい家は一軒もなく、日本の屋根らしいものは一つもなかった。樹木も見えなかつ
た。呼んでも叫んでも誰も相手にしてくれない全くちがった世界に、ただひとりほうり出されてい
る。迷い子ならもったいい。このいやな男のとりこになって、これから毎日こんなひどい目にあわ
ねばならないのか――。

ドアをノックする音に、男は舌打ちしてスリッパもはかないでベッドからおりていった。
「フーズジス！」（誰か！）

答えないでまた強くノックする。ブツブツいいながら男がドアをあけた。

「……何かね。」

「ぼくは隣りルームにいる者だが、何かツラブルでもあったのですか？」

「ツラブルも何もありません！」

「やかましくて寝られんです。昨夜から一体何ですか。どなったり泣いたり……」

「夫婦喧嘩に余計なこっちゃないか！」

たたきつけるようにドアをしめた。ユキはほっとした。危いところを助かったと思った。宵の口からまたくどくどせめられた。友達だという人がやってきて、法律だとか中国人街に売ってしまわれたらそれっきりだとか、おそろしいことをいった。涙も出なくなつて、もうどうにでも、仕方がない深い深い谷底へ落ちこむ気で、ただ身をかたくすくませているばかりであった。

「あん畜生！ ゴッデム……」

きたない言葉をはきちらしてどしんとダブルベッドに大きくなった。目をつぶって背を向けていたユキは、男の方にずりかかると。一生懸命ベッドのふちをつかんだ。なぜあの時、夫婦喧嘩ではありませんが、と叫ばなかったのだろう。ここまで出かかった言葉が、どうしてもいい出せなかった。くやし！ 意気地なしの自分！ 前の晩はどうとう帯もとかないで椅子によつたまま何といわれても動かなかった。散々おどし文句をならべて、訴えたらあんたのお父さんは赤い着物を着なければならぬ、といった。帯に手をかけた。必死にもがいて拒みつづけた。しまいに私の顔を叩いた。勝手にしろ！ つけあがつて——と床につきたおした。